

### 学校にダルマストーブがあった

#### 当番はたいへんなのだ

昭和44年頃まで、小・中学校の熱暖房はダルマストーブで亜炭を燃やしていました。11月になると煙突をできるだけ長くするよう教室の中央近くにストーブを設置してもらったものです。子供たちはストーブ当番がまわってきた日は、朝家からたぎつけ用の細木(たき木)を一束ぶらさげて持って登校したのです。学校にはゆうに一教室分はありそうな亜炭小屋があって、当番が二人がかりで亜炭バケツで亜炭運びをしました。亜炭が塗ると教壇の下に隠して、次の日のために各教室で備蓄したこともあり  
太白区 K

小中学校(仙台市内)の冬の暖房、ダルマストーブの燃料は亜炭でした。学校に亜炭置き場があり、日直がその日の燃料分の亜炭を専用の入れ物に入れて持ってくるのです。昭和30年代初め、今の虹の丘辺りに亜炭鉱がありまだ人が住んでいた。その後廃鉱となり、トンネルに入って家の風呂焚き用の亜炭を取ってきたものです。市内土手内の辺りは廃鉱穴か網の目のようになっていて、団地の家が穴に崩れたりしてしましたね。  
泉区 S

女学生時代、昭和21~22年頃教室のストーブが亜炭でした。ストーブ当番は早めに登校し、暖房の準備をしますが、火のつきが悪くなかなか点火せず、苦労した覚えがあります。燃えても石炭のように暖かくなく、火力のない燃え方と、にほいかするので困った覚えがあります。  
青葉区 N

小学校のストーブの燃料が亜炭だった。冬の朝、当番が亜炭置き場からバケツで亜炭を教室に運んでいた。自宅の風呂も小学校入学前は木の風呂で燃料が亜炭だった。独特のにおいは覚えている。燃えた後の灰は捨て場確保が大変だった。広い底がないと無理。  
青葉区 O

小学校低学年時、亜炭ストーブの燃料として毎朝バケツで運んだ覚えが残っています。  
青葉区 Y

昭和30年代頃、仙台市の連坊に宿舎90戸。各戸の台所には都市ガスが通じていたが、各戸とも風呂場は別棟で台所と風呂場の間に薪(製材の端材)と亜炭を置く小屋があった(宿舎ばかり一般家庭でも風呂は亜炭で焚いていました)。子供の手伝いとして端材を鉋で割り大小の薪を作り、また亜炭も目に沿って割り小分けして風呂を焚くことでした。敷地の中央(テニスコート約2~3面)でソフトボールの野球等で遊んでいると、夕刻に一気に亜炭を焚いたので、その煙と香りは帰宅時間と夕食の合図のように覚えています。小・中学校では亜炭のダルマストーブ。2200名余りの児童を抱える小学校の燃えカスは膨大で、捨て場は水を含むと泥こ状態となりました。  
太白区 S

### 亜炭で生きる人々

私の実家は燃料店を営んでおりました(65年前のお話です)。父は私が七才の時に亡くなり、7人の子供を育ててくれた母が生活の為やった店でした(兄4人、私妹2人)。亜炭ばかりでなく、薪・練炭・炭いろいろの燃料をあつかっていました。そのうち、亜炭を売るようになって忙しく手伝いました。兄たちは仙台の高校に入ったので帰りが遅かったので主に私が手伝うようになりました。私は地元の高校に入ったので主に番頭といっしょに配達をしました。終戦2年くらいたった時亜炭を仕入れたので売っておりました。夕方になると風呂に炭を入れると亜炭のおいか町中に・・・が今つかしく思い出されます。夕暮れの街に亜炭のおいで夕方を知らせるようでした。今ではなつかしくなりました。亜炭が店に入るとカマス(袋)に15kgずつ計って店において売った覚えがあります。  
青葉区 T

戦後我が家(小田原)で燃料店を営み、三本木の亜炭を取り扱っていました。  
青葉区 K

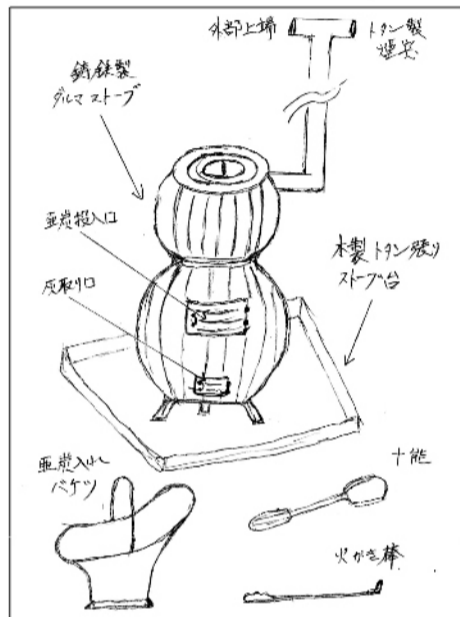
亜炭用ストーブ・石炭・コークス用とストーブがあった。石炭の中にコークスを隠して暖かくしていた。最近まで神奈川に住み、関東の人たちは亜炭が分かる人はいなかった。0℃以下にならないとストーブを焚かなかったで、母親に暖かいものをモコモコにして着せられた。1時間目から2時間目は煙くて暖かくなかった。  
\*

子供(小学校)の頃、上杉小で亜炭小屋と称す小屋があり、小学生はダルマストーブに朝早く7:30に行き、亜炭を焚いていた。先生たちは職員室でキラキラ光る石炭を焚いていた。また、コークスで女子の髪の毛をすいたりして遊んだ。  
青葉区 K

昭和25年頃、勤めていた時の朝の仕事の始めがストーブに火をつけることでした。  
\*

#### 煙の攻防

いやな先生の授業の朝は、わざとうまく燃えないように教室中をいぶして「とてもこれでは授業にならないよ」と授業をつぶしたこともあり(中学生の頃です)。  
泉区 W



#### それでも子供は遊ぶ

広瀬川賢淵に亜炭が大きく出ている所がある。子どもの頃、八幡神社の裏でソリ滑りをしたことを思い出す。側の2軒の家の人に危ないと言われたが、次の日行くとそこに炭がらという亜炭が撒いてあり、それをまた雪で固めてツルツルにして遊ぶという日々でした。炭がらをまいたところはちょうど良いジャンプ台になって楽しかった。  
青葉区 K \*

炭住の横に掘り出した亜炭のボタ山がありました。四季を問わず滑って遊ぶ子供たちがいっぱい。ズボンのお尻が擦り切れるのもかまわず真つ暗になるまで遊んだものです。帰りには少しずつ持って帰りました。翌日学校に持って行ってストーブの燃料にしました。  
太白区 A

### 風呂のこと、家族のこと

#### やっぱり鉄砲風呂

昭和30年代にお風呂に焚いていました。鉄砲釜と云う物だったと思います。青葉区 O  
幼い頃、仙台ではほとんどの家の風呂は鉄砲風呂で湯を沸かしていた記憶がある。またカマドにも使用し、御飯釜や煮炊きする鍋釜をかけて食事を作る燃料とした。霊屋下で生まれ育った者ゆえ、小学5年生頃から風呂の火を焚いた事か懐かしい思い出である。※カマドはクドともいう。  
宮城野区 K

内風呂でもたき口は外、兄弟で順番に当番があり、小さかった私には涙の日々でした。でも、風呂に入れない人がたくさんいたので、内風呂があっただけで幸せでした。  
太白区 A

風呂をたくのは亜炭でした。ふろたきは小学生の私でした。大変な仕事でした。上手にたけないと時間かかり、祖父祖母が入りたいのに待たせることになりました。成人して教師になりましたが、教室のストーブをたきつけるのが大変でした。子どもより早く登校してストーブをたいて、教室を温めて子どもを待っていました。私の家の近くの運転手さんに黒川郡へ宮城県内へ、大衡の亜炭を運んでいました。大衡のうるし田の亜炭山の住宅へ家庭訪問。戸のかわりにむしろをさげしていました。  
黒川郡 N

「テッポープロ」の燃料として使用しました。着火したばかりの時はあまり好ましくない臭いだが、火の勢いが強くなると臭いは消えた。テッポープロは浴槽の片隅にマキストーブのような円筒(中間が若干ふくらむ)形のものをいれ、この筒の熱で湯とした。  
名取市 M

私が子供の時から昭和30年代まで、お風呂は亜炭で焚いて沸かしていました。亜炭を程よい大きさに割っておくのが子供の頃の仕事でした。お風呂は途中で亜炭を足したり、今は考えられない暮らしだったことを思い出します。  
青葉区 T

タキ木をもやして亜炭に火をつける。なかなか火がつかなかったのを記憶しています。  
F

#### 悲喜こもごものニオイと煙

私の育った二日町(北鍛冶町)では、亜炭は余り使わずに風呂にもしてませんでした。製板木でした。そう憶えています。父が近くの木材屋(大友・平形・木材がありました)で買って短くして使っていました。昭和36年、今の三条町(元一条通り)に来て、亜炭を使っていました。山からの杉葉の枯れたもの小枝などの上に重ね(割って)なかなか私には難しいもので(煙ばかり出た失敗)義父がいつもしてくれていました。その義父も他界して、嫁にきての苦しい思い出の一つでした。  
青葉区 W

自宅は風呂桶が木製で亜炭を三本木より取り寄せていたので、お風呂に入る時の香りがなんともいえない思い出がありました。今はユニットバスで、何の情緒もなく体を洗うという役目だけの様な気持ちでつまらないですね。  
泉区 O

自分の家では向山から亜炭を購入して鉄砲風呂の燃料に使用していました。火をつけると硫黄のニオイがした記憶があります。亜炭は向山方面の地層に帯状になっている。広瀬川の崖を見ると現在も見ることが出来ます。  
O

昔は風呂の焚きつけとして亜炭を使っていて、モクモクと焚き始めに出ている煙のにおいが懐かしい。三本木が近かったので、三本木や大衡産の亜炭だったのかもしれない。大きな部材で来るとマサカリで割るのが子供の役割だった。  
泉区 T

毎日風呂に使用していました。燃えているときのにおいが懐かしい。  
N

#### 銭湯でも

戦前一番町のすぐ裏、有名な大きな銭湯があったが、家の裏の風呂場で母が使っていたのを思い出した。又、風呂屋(友人の家)でも夜おそくまで営業していたので、始めは古材を燃やし、火持ちするように亜炭も風呂たきのおぢさんが割っていたのを何度か見ている。戦争が泳引いて若い人は兵隊か工場、女子も挺身隊に行き、亜炭を運ぶ車も無くなった。木炭・薪も配給になり家で風呂かたけず銭湯に行く家が多くなった。  
青葉区 O



展示中の亜炭塊。乾燥につれひび割れる

35年前に仙台市立金剛沢小に勤務していた時に子供たちと学区内の亜炭坑道を調べたことがあります。すでに天井部が崩落し、中には入れませんでした。そこからトラックで西多賀の店まで運び出され、市内に売られていったそうです。名取市内の小学校出身ですが、ダルマストーブの燃料が亜炭でした。燃料当番の時は亜炭を小さく砕くのですが、板状に割れた記憶があります。焚くと少し煙が出てやや臭いがしましたが、後にその亜炭の臭い・煙が仙台の夕方の風物詩と聞きました。  
太白区 O

昭和25~30年頃、土手内・芦の口に炭鉱があってフロの燃料によく使用し、富沢の田園地帯から木流し堀の附近の三軒橋の集落が夕方、フロたきるとき煙が地に下って仙台の風呂誌になっているのを記憶しています。小・中学校のストーブの燃料が全て亜炭でした。馬車で亜炭を専門に売っている方かいました。  
F

父親が亜炭工でした(向山)。鉄砲風呂で熱い時は雪を入れた。ニオイが懐かしい。  
\*

片山内閣発足時、「日本の復興は燃料の開発にあり」という方針のもと出来たのが、配炭公社と亜炭支団。配炭公社という大きな組織の中の、亜炭を専門に扱う部署が亜炭支団。配炭公社は石炭を扱うところで、配炭局ともいって国分町にありました。亜炭支団は駅前丸光あたり、裏五番町ともいいました。

品質チェック、燃やして等級をつけるのが仕事。外から持ち込まれた試験炭で風呂を焚いて入って帰るのが日課。職場に亜炭を燃やすための釜やお風呂がありました。何でも揃っていた。戦後の貧しい時期でも燃料関係では先頭を切っていた。送られてくる亜炭の範囲は県内。亜炭産出量は第1位が岐阜、第2位山形、第3位が宮城。亜炭支団がなくなったのは昭和24年頃。座談会の会場の「野中神社」という名前から、昔通っていた陸軍中野学校を思い出します。当時、群馬県の富岡中学校の一室を借りてスパイ教育が行なわれていたんです。生徒は数人しかいませんでした。私は大正10年生まれ、いろいろありました。  
青葉区 K \*